うたそら

第3号

2021 July 7

参加者一覧 …… 02

連作欄 8首の連作 自由詠 …… 04

テーマ詠欄「遊」…… 26

一首評「そらよみ」 …… 34

短歌リレーコラム「望遠鏡」…… 36

リレーエッセイ「いちごいちえ」…… 38

次回予告・編集後記 …… 39

うたそら 第3号

ご参加いただいたみなさん（五十音順）

計109名

たくさんのご参加ありがとうございます！

相河東	@aikawa_azuma
青藤木葉	@konoha__ao
あき子	@ponko_san
秋山生糸	@kiito25
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
足立のびやか	
アダムス理恵	@adams_tanka
天野うずめ	@uzume_no_hijiri
雨虎俊寛	@amefurashi3107
新棚のい	@hccmono
有村桔梗	@chattenoire_k
五十子尚夏	
石川順一	@Hitler57
泉　葉子	@yoko00022
伊藤すみこ	@110sumikodayo
うきすけ	@ikeeeeeee13
宇祖田都子	@shinnsyutu2020
泳一	@Ejshimada
hs	@hswelt
江口美由紀	@miyuki_eguchi
大坪命樹	@@OotsuboMeiju
岡田奈紀佐	@spice16g
岡田濫	@kakomiyano
小椋　杏	@ogura_anne
音平まど	@nandemonaihi16
@kaizen_nagoya	@kaizen_nagoya
金森人浩	@hitohitohitok
がね	@amicus08
神ヤ飛び魚	
凋れ井戸	@kareido1111
河岸景都	@kate_kawagishi
菊池洋勝	@kikutitc
橘高なつめ	@coconutkikko
きつね	@001kitsune
君村類	@kmmr_r09
久助	@nTblBm64shlt1ap
黒須紗里菜	@tuki1226
くろだたけし	@tkuro2016
こうげつしずり	@umisorayoru
古閑弓子	@yumikokg
小泉夜雨	@kozumi_yau
御殿山みなみ	@1ookat2
近藤あなた	@anata_tanka
酒匂瑞貴	@sakawa_mi
さとうはな	@s_hana111
佐藤氷魚	@satohio_tanka
汐射ハルカ	@haru_c17h17cl2n
紫苑	@purple_aster
詩季	@4kitanka55
鹿ヶ谷街庵	@ikasamabakuchi
しのだめい	@qop397

嶋田さくらこ	@sakrako0304
西鎮	@xi_zhen_ivUT
雀來豆	@jacksbeans2
諏訪灯	@_skydew
セサミスペースM	@sesamespace_m
草流	@kusa2619
たえなかすず	@suzusuzu2009
多香子	
瀧口美和	@abcdefghijklmiw
竹林ミ來	@chik325
田中翠香	@suikakinenbi
茅野	@white22autumn
千原こうはぎ	@kohagi_tw
chari	@greeenchari2
月硝子	@gesshodo
遒家俊雄	@csSR34JCfLTXWmr
ともえ夕夏	@croissant_hey_z
中村成志	@nakam8
成瀬悠	@naruse000yuu
にう	@yuru11ne1217han
西淳子	@Jacky244Ray
西村曜	@nsmrakira
ネコノカナエ	@nekonokanae_uta
薄荷。	@aie0himeco
はとサブレ	
花井かだ	@sugar_high10
花浜紫檀	@ruri_murasaki
雛河麦	@may_spica_358
ピプノ寿司マイク	@xHksbNR4wv1wj8M
平本文	
廣珍堂	@Hirochin_dos
笛地静恵	@Ymcx6rhzvjEZgwq
福山桃歌	@momoka_fukuyama
ほしむらコト	@cotto91100602
細川エリカ	@luvluvkasen
歩歩	@h_o_o_o_n
まさけ	@mskpompomfuwa23
真野ありか	@o_shironec
御糸さち	@MEATsachi
三浦くもり	@miurakumori
三浦なつ	@natsumiuraok
深影コトハ	@cotoha_mikage
衣未	@mimi_4567
虫武一俊	@mushitake
六浦筆の助	@Tohakumutun5057
六厥めれう	@mereumumai
村田一広	@mucci2018
最寄ふぇチ	@xaviercohen
ゆや　ゆき	@yuya_yuki_tanka
ゆりこう	@b7282e_akaneiro
吉田八尾	@yaotanka
夜花	@yohana_no_sekai
龍翔	@oppizuntsuan
芦花	@roka_06
若枝あらう	@WakaedaArrau
渡辺かもめ	@lazybirdcage.t
渡邊知博	
和田晴美	@hrm143ponta

Blue Neighbourhood

相河東

僕たちは愚者のカードを引き当てて教えを捨てる街を出ようよ
不死鳥ですら灰になるんだからさ、病のままに、歯は当てないで
スイミングプールや名前、飛行機が崩れ落ちても変わらない人
夜を超える　抱えた子守唄を見て大丈夫だと息を繰り出す
歳をとる暇なんてない指を組み赤信号を通り抜けよう
迷子にも見つかる準備があるのです　希望の塔をちょっとのぼって
別にアイラブユーじゃなくてもいいじゃん月は忘れてピザがうまいね
朝の空気に塗りかえるいつだって青い世界でなくなりたいから

なのはな

秋山生糸

菜の花 なのはな あの日からもうなにもかも違う世界に棲む熊ん蜂
切られてもまた同じように跳ねてくる癖毛　ひかりの中を歩くよ
ビル解体滞りなくこちらではクロワッサンが育っています
目をあわせるふりがずいぶん上手だね　指先に絡み出す夢の糸
見晴らしの丘より見れば蛇行する川に巻かれて安らかな街
でたらめな握手でも繋げれば良くて初来日のパンダを祝う
クリームにぴんと角立つようにして今だとわかる　きみとわたしの
陽だまりはとろりと溶けて死んだこと気づいていないおばけの気持ち

夏のぐだぐだ

足立のびやか

春過ぎて夏来にけらしコーヒーの冷たいやつが飲みたくなった
青のゲシュタルト崩壊起きそうなべったりペンキ塗りたての空
空色を空で定義するのならＰＭ５時の空は何色
もりもりの入道雲を見るたびに疑問に思う入道ってなに
「しあわせ」に形というのがあるのなら例えば寿司の形をしてる
もうこんな世界だったら意味はない大ラグナロク推しの引退
日付変更線来るなと眠らない徹底抗戦午前３時
徹夜明けボロボロの脳と心臓で迎えた朝日世界はきれい

疑問符

天野うずめ

鳥籠のように記憶は悲しくてふいにあなたと立ち止まりたい
せめてもの慰めとしてあるというまだ僕たちがいなかった頃
電車から見えるイオンが大きくて走馬灯にはなれないだろう
疑問符がない生活の中にいてGoogleマップの文字の多さよ
ぶよぶよになったきゅうりを捨てるとき神の目つきをしている僕だ
ある程度気持ち悪さを覚悟してハンバーグを切る　何もなかった
そうやって逃げてきたんだほとんどを無口なままで終わる夕食
透明なもので包んだ違和感を言葉にできず次の話題へ

ウメダウーマン

雨虎俊寛

待ち合わせ前にルクアの４℃できみの誕生月をつたえる
まだ箱を開けてはいないプレゼントみたいにきみはポニーテールで
吹き抜けでお出迎えするカールスモーキー石井の真っ赤なクジラ
ぴちょんくん大看板を真っ先にきみが指さす（手をポケットに）
今だけの空をあおいで夕刻の観覧車から追った航跡
高速の列なす尾灯　宵闇の青が訪れビルをふちどる
「観覧車咲いて消えるの花火だね」何度かきみは振り向きながら
耳たぶをつたわりゆれるサファイアは瑠璃唐草の夜露のようで

ナツウタナツコイ

新棚のい

一目惚れ誰よりナツなマーメイドこれってもしや運命の恋？
我愛你（ウォーアイニー）ビーチサイドのＶＥＮＵＳへヒトナツの恋一緒にしよう！
はつなつの波打ち際で恋をしたきみと百年先を生きたい
昼下り微睡むきみのパラソルになりたいくらいきみが好きです
僕たちはパピコ分け合う距離だからもっと近づきたいと思うよ
夏期講習帰りの道を二人きり歩く５分が夏の楽しみ
新しい浴衣は大人びた藍できれいだねって思わず言った
花火咲く宵の空見るきみの横顔がきれいでまた惚れている

The Portrait of Early Summer

五十子尚夏

月光は五月の雨をくぐりぬけ波止場というこのうつくしき場所
モーツァルトに副作用あるらしという眉唾まことしやかに皐月
Heavenly blue という名が朝顔を離れゆき青そのものとなる
はつなつの夢のあわいに自画像を残してバンクシーは去りたり
フーコーの振り子に触れたわたくしの裡にはつかに傾く地軸
Windows のアップデートのごと過ぎて六月は誰がためのまぼろし
螢　わたくしの眼に燃え尽きてゆく夏の夜の永久機関
海へ来て理由(わけ)なく泣いているような女がけれど美しかった

「難解な奥歯」

石川順一

アルコール飲料ブルボン王朝を知って居る鳥が朝に囀り
奥歯にはサラエボ事件がやって来てダリの絵画を嘲笑して居る
胃洗にはアシスタントが要るだろう月の蓋ではお茶が零れる
難解な奥歯に恣意の私意が有る紫衣を着る僧おかげ横丁
時が満ち奥歯に服がかけられる若葉と同じ色のアリマキ
昼間からビールは飲まない平等を壊して居るのはレモンサワーか
難解な奥歯に口内炎が添い漆喰工事が終了しました
カルピスを炭酸水を混ぜて飲む僅かな驟雨が午前中に降る

ほころび

泉　葉子

恨みまで捨ててしまった君なんて生き物じゃないとあの子は言った
泥のなか咲いたあなたに言葉など届かないはず戦ってゆけ
片腕を失くしたっていい願いが叶うのなら当たり前でしょう
大脳に居座る砂絵とかしてるネクロフィリアの夢うつす朝
奴隷から神に成り果て鞭打たれそれがあたしの骨になったよ
善い人の皮で巻かれたマリアンヌ誰かの為じゃ生きてられない
むずかしいこと言わないで好きでいてベッドの上でごはん食べよう
ほころびに光が差すとき世界を愛し始めるぼくは死なない

エンドレス・サマー

伊藤すみこ

波止場から広がる海は無機質で街の全てを包む風呂敷
トビウオを一緒に見たい全身ではしゃげる人に出会えたようだ
ドライブの側から遠慮されている土曜日はまた大雨らしい
二学期の初日のようにぎこちない関係性を保ちたい夏
アウト・イン・アウトを常に意識して魚群の中で波に揉まれる
ねじひとつ無くした夜の象徴は鱗のごとく輝く目蓋
プルメリアだらけのシャツを着ただけで太陽よりも眩しいわたし
ばあちゃんのアイスあるよはあずきバーあるよの合図　もう来ない夏

アスファルト

うきすけ

ポッチャンと一滴よだれを垂らしたら重たい腰を上げるエアコン
春すぎて「お客さん忘れ物ですよ」天窓ごしに夏来るらしい
引き出しの奥で壊れた要から芽吹いて扇子は6年目に咲く
高架横の一方通行無視して自転車駆けるパス、Path の響き
立ちこめて揺らぐ水蒸気　暗渠ではないけどたくさん柱が架かる
雲間からシーブリーズが漏れてきてフタ閉め甘い雷神恨む
置いてった傘を見つけた先輩と蝉とプールと焼けたアスファルト
寝て起きて西日をうける貯水タンク梅雨前線偵察機なし

屋上猟部　Ⅲ

宇祖田都子

かたつむり注意の掲示吹き飛ばす青葉嵐に真夏の予兆
ドアノブが引っ張るたびに取れる日に受信している微弱な電波
屋上が水面と化す梅雨の晴れ波紋はバクの産声だから
板書するリズムで分かる先生が温めている卵の中身
猟部にてラ行変格活用のように口承されてる哀歌
踊り場が浮遊するのは中庭の池の形が透けているせい
機関紙の編集会議七月の特集記事はバクとピロティー
夏服の胸ポケットにシャーペンの2ミリの芯とシュプレヒコール

雨あがり

泳二

待つような待ってないような顔をして中央改札口に朝九時
Tシャツの首の後ろのチクチクがやけに気になる君が来るまで
ふと会ったような感じで近づいて君はおはよーと語尾を伸ばすのだ
速足で君を置いてかないようにすぐにごめんと言わないように
雨あがり優しいものがあちこちに君は外見ばかり気にする
水量が増えた河原をゆっくりと歩いて暗い高架をくぐる
コンビニのお茶をベンチで分け合って桜が咲いてない公園で
次に会う時は真夏だ信号を待つ学生のワンピース　真夏

冬の離島へ

江口美由紀

島の地図に安里屋クヤマ生誕の地と墓がありまず墓へ行く
自転車で浜へ下ればぱいかじに冬には冬の蝶おとずれて
手のひらを海にひたして星の砂さがす遊びは二分で終わる
ならぬならぬビーチリゾートならぬという札が三本等間隔に
安直に同意しかけて立ち止まる　イペーの花が空が見ている
雨上がりの闇はリュウキュウアサギマダラ飛び交うような気配に満ちて
それはそれは美しい妻を（サーユイユイ）娶ることができなかった君よ
この浜を二人どこまで歩いてもどこまでも島民でない影

朝きゆめ見

大坪命樹

眠たきをコーヒー飲みてふるはせしあのころの朝今は思ひ出
起きてすぐきみ眠りをるやとみやる顔のそばにあることあたたかきかな
モーニングデプレッションが正体ぞ会社勤務のもの憂きなるか
春のあさ病ひと古りに汚れたる我がこころぎは絶えて染めなむ
まどろみの深きうるおひ偲ばるる涸れしここちの五十路の朝かな
あしびきの山路のほどにいつか見し旭の輝きおぼろに偲ぶ
朝寝坊たのしまるれば休日の恋しかりきか　ああ睡眠力
若き日の眠気ぞ死への郷愁か歳ふり眠り浅くなれるは

どうかしているかい

岡田奈紀佐

嘘をつく準備のためののど飴をSuicaで買えばペンギンが鳴く
まだ生きているのだろうか短冊に粉骨砕身と書いた男子
音姫を鳴らしてトイレで泣くというドラマのシーンを真似てみただけ
お手元に早押しボタンがないときは二分休符でも代用できます
世界での存在感がないためにどの髪形もしっくり来ない
ドーナツの穴なら海へ向かったよ来世は泡になるんだそうだ
目薬を点した直後のゆらめいた視界の隅に飴のセロファン
折りたたみ傘をたたんで城島が釣り師になった世界を歩く

現代女性歌人展　返歌(1)

@kaizen_nagoya

水道の蛇口の水を一杯ねどんな料理の後にも空に
富士噴火地震津波事故事件ひとに見せろよ分析結果
似合うよね羽衣来たらかろやかに後追う我の悩みを飛ばす
滝匂い水のイオンと植物の匂い混合分析したし
観覧車ちゃり銭ぶちゃけ真っ白に意識遠のく君は見ぬふり
白鳥の群れが来る池湖で泊まる優雅な歌人を思う
花見弁当ひらいて行う安全の分析戦争放棄を含め
ろくでないごでもよんでもないんです桜の雨の鶴舞公園

週末メニーサンクス

金森人浩

水を飲むつもりで水を入れたのに昨日のせいで薄い珈琲
もしかして爪切りだけを専門に盗む空き巣がいるのだろうか
囚人の助言で女子が犯人を追うアメリカの映画を借りる
デパートで偉そうだけど役割を果たしたことがない食器たち
火星に住むときに備えて一人でも楽しいボードゲームを探す
朝四時にもらったログインボーナスが今日という日をさらに彩る
カニカマはカニカマの本物目指しその先にもう蟹を見てない
労働を明日の僕にさせるためアラーム予約して僕は寝る

一人称

がね

見下ろした私の手まで私だといつから信じ始めたんだろ
眼球に私がいると思う日はホットアイマスクをしたくなる
脳みそがぐわんぐわんに揺らされてジュースになっても私の死体
お互いのキャラのチューニングが済んでいない時だけ「僕」が生まれる
ドラクエの勇者にがねと名付ければ立派ながねが魔物を倒す
静物に分類された林檎から覗かれているスケッチブック
雨粒を拒否するための傘をさす　浮かび上がった輪郭になる
友人の自虐にそっと笑うたび海馬の中のみどり児が泣く

益獣

涸れ井戸

オンライン句会に歌会点と点つながってゆく不思議な時代
毎日のようにメールを書きブルーライトカットの眼鏡を洗う
大小の公募いちいち気になってスパーリングのつもりで応募
自習用ノート全然埋まらずに何処かで何か空回りする
玄関にヤモリ這ってて先週は車の中にも潜んでいた
「ネズミ捕りホイホイ」が良い仕事場でアドバイス得て買って帰った
ヤモリとは益獣である良心と葛藤しつつホイホイ使う
モニターを介し近況語り合うヤモリのことは話さずにおく

二と三の間

河岸景都

幻想を本物にするあの人の腕の角度はきっと正しい
紙切れが夢への切符になる今夜、一バル五列四十五番
身体を得た少年は走り出すまた来る夏をバトン代わりに
イコールで繋がる式の解答は文字にならない言語に変わる
銀河でもペンライトなど光らせる明日に届くいのちの色で
境界を越えてイデアを掴むもの現実だって信じてもいい
小数点以下が宿した神様を見るために撮る定点カメラ
二と三の間に生きるあの人の声の高さは書けない音符

それうすべてを抱いて眠らう

菊池洋勝

屋上遊園地のクレーンゲームそれらすべてを抱いて眠らう
海遊館の甚平の縫いぐるみそれらすべてを抱いて眠らう
金髪と宇宙遊泳今朝の夢精それらすべてを抱いて眠らう
西遊記夏目雅子のピンナップそれらすべてを抱いて眠らう
三遊亭某の噺のテープそれらすべてを抱いて眠らう
背の順で並ぶ遊戯の練習すそれらすべてを抱いて眠らう
松島を巡る遊覧船を偲ぶそれらすべてを抱いて眠らう
遊牧の少年が絵の主人公それらすべてを抱いて眠らう

隠れ家をさがして

橘高なつめ

食べログで調べてきみの予約した隠れ家レストランはもう無い
常連のような顔して行くたびに看板犬によく吠えられた
昨日までなかった花束のように電信柱によりかかるきみ
コンビニで買うハンバーグ手作りの崇められてた時代は終わる
表情を歪めて二人食べ終えたレシピどおりに作ったポトフ
見覚えは無いのになぜか懐かしい風景になるあなたといれば
シャッターの音鳴りやまぬ部屋を出て口笛吹いて忘れるいつか
呼び捨てに慣れて互いの本名を明かさないまま今日も別れる

叛乱後夜

君村類

なんでも話してみてくださいと言われても話せる話は、あ、　雪
ケンタッキーをいちいち開いて食べているひとにもあった軟骨の白
よりも強いならばどうしてペン先は尖って剣に似ているのかだ
なにひとつ無駄なことなどないという絶筆に降る雪のまばゆさ
燃えていく街を見ていたひとだった燃えていくのはそのひとだった
そんなものなのだと思うそのものにそんなものだともう思えない
(なんのために?)なにかのために(なんのために?)生きるつもりだ(なんのために?)
左様なら、さようなら、二月のつめたさへ開いた傘に雨は降らない

納涼会

久助

顔剃りは男の仕事と心得し母に言はれて床屋へ行きぬ
学校の向かひの床屋に入る吾を男子ら見つけてからかひにけり
耳の裏剃らるゝときに初めての戦慄走る九歳の夏
全身にネットワークの走るさま体感したり教へられずも
初めての御端折りのある浴衣にはうすむらさきのあぢさゐの玉
ちりめんの覆ひを上げて姿見に対へば母の呼ぶ声がする
左足、右足出して左足斜めに引けば膨らんだ月
輪の向きはなぜか時計と逆回り一足ごとに眩しき灯り

障害者雇用②

黒須紗里菜

シャチハタがかすれて薄くなるように私もなにかを減らすのだろうか
おさなごのように眠れる眠剤があれば私は悩まないのに
障害者雇用になれて青あざを右足ばかり私はつくる
統失をジャンヌ・ダルクよなかったか?神様の声は自分の気持ち
番組の予告みたいにコロナ化で支援員さんと受付で会う
一時間で語りつくせた日常を私は生きて終わる面談
手を洗うことより判を押すことが多いであろうわたしの仕事
入社して半年すぎた心境はマラソンみたいにただだた必死

西暦二千二十一年六月の扇風機

くろだたけし

大切な書類が風でばらばらになっても笑わない扇風機
うなづいて励ますような場面でも横に振るしかない扇風機
生きている人が近くにいなくてもまわり続けている扇風機
一時間まわっていればモーターに熱が溜まってくる扇風機
足もとに風は届かず夜死んだ虫の死骸がある扇風機
タイマーの時間が経過して止まり止まったままになる扇風機
まわらずにただ佇んで窓からの風に吹かれている扇風機
全力の「強」であっても人類の脅威にはならない扇風機

あぢさゐ苑

古閑弓子

裏通りゆけば鳴るなり軒先に風の訪問告げる風鈴
大空をささへるやうに立つてゐる鳥居に二羽の鳩が止まりつ
境内に靴裏の跡あまたありわが靴裏もやがて紛れむ
木の間よりスポットライト差すごとくひかりの中にひらく紫陽花
やへの花濃きも淡きも集ひたるあぢさゐ苑を並んで歩む
くねくねと道を曲がりつどこかしら出会つた気がする花も眺めて
あぢさゐの色のかすかなうつろひとこのひと月の雨量を思ふ
六月をしづかに畳む紫陽花はスマートフォンと胸に収めて

夏至の外面

小泉夜雨

ややゆるい眼鏡をかけてわたくしの挙動でゆれうごく世界たち
ふさはしい公園として陽を浴びてまことしやかに朝のはじまり
不穏な天気になつて参りましたと布団を干したをんなの顔で
閉ぢた目に夏至を泳がせ人々はたつたひとつの夢をみてゐた
さいはひ、それはずいぶんやはらかで、それは山崎パンのトラック
袖なしの防具はためきさんさんと暴力のふる公道をゆく
壊れてもいいものとしてわたくしは在る　さやうなら、もしお別れならば
みづうみをすべることからその鳥は花筏とも云はれたのです

メメント

御殿山みなみ

信号が赤のときだけ見る木だね「いちょう」の下に（いちょう科）とある
突っ伏した背中に乗れる季節って梅雨だけだろう机に輪ゴム
配達の人にきちんとお礼する遺書に名前を書かれたくない
日本人だけどピアノを弾けたなら弾くのだろうか日本の曲を
屈強な男に「十万円です」とすごまれて払ったカードだよ
東京のオリンピックをつねったら痛がるかしら画面越しでも
人生をやりなおすあと覚えてる前の人生　ちくわに、穴が
からだじゅうポでございますラーメンをラーメンスープから剥がしてる

召命

近藤あなた

Calling　たとへば鳥のさへづりや草木を揺らす風に喚ばれる
Calling　召命として与へられしことなどなにもないことを知る
Calling　さすれば我は如何やうに生きればいいといふのだらうか
Calling　骨董店の片隅に売らるる古いボーンチャイナよ
Calling　混じり気のない少年の眸をかつて持つてゐたこと
Calling　馬、両翼を無くしても我には見える（まぼろしなのか）
Calling　全方位ビルに囲まれて、耳をすませばうめきごゑする
Calling　きみが泣くなら我も泣かうメトロポリスの一員として

ほのほは踊る

酒匂瑞貴

黄砂にて隠れてしまふほど薄い真昼の月の疼く春空
君じやない人が好きだと言つていた絵画を見上ぐ君と並んで
ゴッホの描く黄色はほのほ吾の殻を型取るやうに燃ゆるひまわり
糸杉は真直ぐな木だと話す吾を君は光のやうに見つめる
空が生きているやうだね星月夜を観る横顔は口をつぐんで
皮膚の下ほのほは踊るお互ひの痩せたる腕をきつく絡ませ
すれ違ふ人々すべて吾にすれば世界の補色となりたるゆふべ
アーモンドの花の絵の中もしも吾が吾じやなくなつても引き止めてゐて

プリズム

さとうはな

うつくしい歌集を伏せれば満ちてくる知らない街の雨の匂いは
白雨とは夕立のこと　夏の間にさみしい人だけひかる川べり
プリズムが光を集めまた放つようにあなたは嘘をこぼした
写真には映りきらない薄霧と朝の公園、冷えた手のひら
目を閉じて聴けばまぶたに降りかかる雨も雨水によく似た声も
どうしても、とあなたは子どものように言う泥のサンダル川ですすいで
モニターの映画の中の街並みにコトリパンの字やさしく灯る
永遠は過去にだけあり散らばった言葉を集めるように花束

風の抜け道

佐藤水魚

かなしみを置き去りにした真夜中のバス停に降るひとすじの星
足下でたゆたう月を蹴ってゆく夜の雫に裾を濡らして
花束のほどける記憶　ひときれのフルーツタルトにフォークを入れる
わたくしという映写機が映し出すたったひとつの悲喜劇がある
過ぎた日の水を吸い上げガーベラのか細い首はますます細い
簡単なことだったんだ朝が来て窓を開けると風の抜け道
A線（アー）の弦がゆるめば糸巻（ペグ）まわし音の流れにふたたび乗ろう
まっさらの手帳にミントキャンディは緑の茂る季節を描く

はつなつこい

汐射ハルカ

まあるいね、夏の緑と黒い縞赤い三角きみはどう切る？
かきまぜて青い水玉はつ恋を早まる鼓動鳴らす氷を
かわいさの時はすぐさま過ぎるけど波残りの気配たのしさ夕焼け
あいのほし宿したきみの瞳から放つひかりはまちを照らすよ
悠久を流れる河や星霜（いくとし）の隔たりなどは超えていけるさ
かがみ見る目尻そばかす深い溝めだまは茶色くせ毛も茶色
部屋の灯を消して暗幕おりてきて浮かぶおもかげ伝いことばと
かみさまがくれた僅かなさちかぜはめぐりあわせのきせきを走る

つくる

詩季

幾千のプロセスを経てここにいる二人で種まく庭は涼しい
同じ人教えたはずの餃子でも姉妹は違うひだを重ねる
それはもう美味しいはずだ実家から戻る早朝父のコーヒー
藤の花掘った墓石はくもり色仕上がりを見てよし、と言ってね
あの日からずうっとずっと新しく作られ続け道は終わらず
ほうれん草すり潰しては舌に乗せ君を見つめた　終わりゆく離乳
その歌がしみる理由を知りたくてまた噛みしめる何度も何度も
種をまき苗に水遣り実を拾う僕らを生かす土は黒々

急所を教わる

鹿ヶ谷街庵

新緑の中にあなたがいるようでツツジの蜜をいやらしく吸う
カンフーを習いはじめた姪っ子に人の急所を教えてもらう
真夜中にアパートを出る　月光が吠えない僕と犬とを照らす
キスをする予定もなくて王将で餃子をひとり食べる土曜日
満室のラブホの前で考える滅びていった文明のこと
日曜に家族でパフェを食うという並行世界の小説を書く
理科室の人体模型を透けすぎた女体と思えば鼻血がでそう
あんぱんをちゃんと半分ずつにしてひとりで食べるとちゃんとむなしい

NO PRINCESS, NO LIFE.

しのだめい

そこら中みんなプリンセス愛だとか正義の己を信じてるから
わたくしが眠いと言えば夜になる日本に極夜が訪れて二年
真夜中に路地で歌うサラリーマンもきっとプリンセスになりたいの
スカートを履いてない日に座る時ついスカートを整えてしまう
おポテチをいただきますわとか言えば小さい頃のわたし喜ぶ
片方だけ靴を置いたり泡になることすらできず不器用は悪
何を着ても四季はわたしについてくる夏が最近でしゃばり過ぎね
真実の愛はおまけで本当は度胸と根気、運でしょディズニー？

虹を待つ

嶋田さくらこ

鳴き声も毛並みも生きているみたい水無月の浅い夢に会う猫
ひと夏を君と過ごしたタイトルを覚えていない映画のように
あかねさすケンタッキーをほおばっていつか誰かの役に立ちたい
海で拾う石に名前をたんたんと生きる日々にも表彰状を
夜を朝を昼を過ごして宛先を書かない手紙ばかり増えゆく
ズッキーニすべらかに切る夕暮れに猫はあくびを我慢できない
夢も希望も欲望もない日曜日はホットケーキを食べに来ないか
ソーヴィニヨンブランを贈るわたしではない人とゆく君の門出に

水無月文月

西鎮

君づけで呼ばれてたっけ六月の湿った風にさよならをする
お互いへ点けた漁り火追うようにまた歩きだす東京は海
たんたんと仕事をこなす華奢な背をひくくさらして親燕飛ぶ
ピストルズを教えてくれたにいさんが通えなかった高校へゆく
とうさんのメガネをかけてとうさんの強がりだって気づけば夕陽
薄荷飴砕いた奥歯ちっぽけなぼくがみあげた七月の空
萎れかけた紫陽花にふる雨だった　やさしいひとを信じきれない
あまがえるが肺呼吸して鳴いているぼくらがいまだ慣れぬ世界で

六月の雪を思えば

雀來豆

あおあおと光りだす躰よ四月この古い歌集を文字に起こせば
五線紙に撒き散らしたる月の骨ほろろと夏の雪降らしめよ
側溝の蓋から覗く露草の青が光って五月を告げる
水無月ぼくら魚のように沈黙しビル・エバンスの水玉を聴く
八月の風吹きぬけて鷺池に幻のごと百日紅ふる
さて椅子はどこにもないのにどことなくあるって気のする十月の夜
霜月朔日ロビンソン百貨店屋上森森として月蝕を待つ人のなく
灰色の九月のビーチハウスではまだ瓶入りコーラを売っていた

通院日

諏訪灯

ノンストレステストの音がする　胎児はもうすぐ乳児に変わる
妊婦より中年婦人が多い日で待ってる私は中年側で
そういえば内診を恐れなくなったずいぶん時間は掛かったけれど
マタニティーヨガの掲示で思い出す逆子が治るのを願った日
今日もまた産まれる命と閉じていく命がここで交差している
平熱を受診資格とされているそんな矛盾に慣れてしまった
長椅子に規則正しい空間を生み出すように誰もが座る
昨年も例年通りの手術数でしたと伝える紙の尊さ

ストロベリー風

セサミスペースM

風の駅目の前に立つワンピース、ポニーテールはためきフラッグ
近くで、めがねを顔からはなして眺めている女性のしなやかさ
辺りを照らして粒々の太陽粒々のひかりの球体で
引っ越してカーテンの下が足りないしかたないお部屋のチラリズム
菜園の緑の棒に白い紐結ぶ老人と紋白蝶
菜園の緑の棒に黄色い紐結ばれて無人紋黄蝶
掃除機にストロベリーを吸いとられ酸っぱいやつに決まっているぜ
トートのなかに入りたいそれを君が首からさげ草原をゆく

オレ、無職！

草流

もう無理だもういいだろう妻に問い退職届一気に記入す
そんなにも気取ってメイクしてるけどパートに行くだけだろう妻には言えず
弁当を作ることなし妻はまだオレの隣で夢の中かよ
定期預金オレの名義のはずなのにお礼の品はサランラップか
アンケート職業欄は無職です自信満々記入するオレ
毎日の昼飯なんにしようかな退職後とはそういうことか
妻パート忙しそうにしているが横でのんびり録画の準備
新しき家族が増えた春の午後子犬の名前海賊「ルフィ」

チョコレートコスモス

たえなかすず

来るという花占いにサンダルの可動域さえひろがったのに
江の島は雨降り　小径で影法師、こどものように踏みたかったな
そうじゃない、傘をたたんだ　あんなにも怒った顔を初めて見たわ
ため息で吐けないものがいつまでも胸に涼雨という名で残る
正当化できないことをユニゾンのように私も歌うのかしら
なりゆきという恋や愛じゃない日々　ワイパーがそっと涙をぬぐう
無計画にあなたを撮ってそれきりであの野のみどりいよいよ深く
去ってゆく後ろ姿はチョコレートコスモス　地球でまた会いましょう

恋は夏模様

多香子

今日咲いた朝顔二つお互いにコンプレックス隠すその色
窓の下きみの自転車走りぬけ　夕陽をすう背がこんなに恋しい
午後一時やさしい風に包まれてあなたと猫が昼寝する夏
今宵こそきみを乗せ飛ぶ天の川　星に濡れないように静かに
いつだって私の恋はみどり色ソーダ水のしゅわしゅわのよう
桃色の月がのぼりてきみを待つ　十六穀のおにぎり作って
ひまわりの迷路できみを「好き」と言う勇気もてたら明日は天気
武蔵野はどこまでが夏すずやかに欅並木にインコがとまる

すくわれている

瀧口美和

パンプスとストッキングをはいたまま跳びこむ瑠璃色の水溜り
土砂降りが夜道を照らすギラギラときっとこれからいいことがある
街明かり、車のライト、雨の日の帰り道ってナイトプールだ
本当に防水だった最新のスマホで雨の最期を看取る
友達をナイトプールに誘ったら「何やってるの！すぐに行くから！」
大きめのタオルを持ってきてくれた雨より先に涙を拭いた
「すぐに無理しちゃうんだから」沁みとおる声に今夜もすくわれている
本当のナイトプールに行こうって約束をした雨は止んでた

からくりホリデー

竹林ミ來

からくりの館もきょうは休館日なのでからくりたち街へ出る
白黒の小鳥の群れが通過します　白線の内側にも来ます
からくりは感染しないはずだけどヒトに合わせてマスクもつける
くせのあるコーヒーばかり飲んでいる　くせ毛をずっと気にしてるのに
64種類の味から8つまで選べるピザができると予言
体内のクリーニングに膨大なサラダを買ってサラダと過ごす
月食に生まれ変われば食べられるときを待っては戻るよろこび
マンションの詰め替え用の人間をストックしておくアパートに住む

風になりたい

田中翠香

たくさんのためらい傷を心臓に残すあなたと夕餉を食べる
あなたにはあなたの地獄があることが時に私の希望に変わる
だとしても僕はあなたを泣かせない風の強まる海岸通り
生きるとはひたすら食べていくことだ少ししょっぱい今日のたくあん
頑張れと言わず言われず生きたいな窓辺にグラジオラスが咲いてる
いつの日かあなたが語る物語そこに私がありますように
それぞれの孤独と秘密を合鍵のように交換し合うふたりだ
来世では空をめざして草原を吹き抜けてゆく風になりたい

マングローブの森で

茅野

メヒルギに近づきすぎて傾いたほうに心の重心がある
ヤドカリをザリガニと間違えたときちゃんと教えてくれてありがとう
潮汐を確かめるよう君が二度、汽水を舐めてしょっぱいと言う
海の森に迷い込んだら少しだけ湿った空をゆっくりと吸う
すもも味のソフトクリームを酸っぱいと笑った顔は君だけのもの
待つことが苦手な君がゆっくりでいいよっていう瞳をしてる
「また行きましょう」に「はい！」って返事する感嘆符に重きを置いて
ひとりでは進まぬカヌーだと思う　君と一緒に歩いてみたい

handmade

千原こはぎ

カボションでつくる星空　眠れないわたしを空っぽにしてほしい
夏らしくクリアパーツをぶら下げてかすかに重いくらいが恋だ
ゴールドのフープは揺れるためにある　あいたいはいわないいたいあい
アンタレスみたいに紅いひとつぶをピアスにすれば嘘はくずれる
完全に戻らない丸カンのよう捻じ曲げたあとのふたりのずれは
グリーン、ブルー、べっ甲、クリア　砕かれた心みたいに散らばるパーツ
星ひとつ加えてピアスは完成しわたしの夜をかすかに照らす
星屑をあつめて瓶に詰めておくいつかだれかの夜空のために

いろはすボトル

chari

自転車が生み出す風に舞い上がる帽子が夏を駆け抜けていく
唇がふと重なった夕焼けをいろはすボトルに閉じ込めてみる
目覚めたらすぐに下着を探すのは僕だと君は窓へ駆け寄る
見た目より悲しい罪を宿してる薊は棘を隠せやしない
密やかに肩甲骨を震わせて飛蝗の脱皮のごとき苛立ち
閉じること許さぬ深き傷口をふたりで抱いて乗る山手線
喪った人の貌を日々なぞる鉛筆の線の掠れゆくこと
傷ついた痛み傷つけた悔い傷さえつけられなかった悲しみ

ツキガラスの動物園

月硝子

花や雨、恋の記憶を醸しつつ猫の額は濃く香り立つ
宵闇に放物線を数知れず描いて恋をする白孔雀
あどけない笑みは奈落のふちどりを秘め柴犬の黒きくちびる
描線のあらゆる型を見せながら川面を泳ぐ蛇の神速
返された原稿用紙に月影が差して蜘蛛へと変わる文字列
指輪とかピアスや靴をすぐ投げるゴリラの檻に似た失恋歌
しがらみがノアを捕らえて人間のあたりで歪む方舟の列
たそがれに軋む廊下でもう逝ってしまった猫の出席を取る

なまものでございますので

道家俊雄

なまものでございますのでお早めにお詠みください、四季の風より
尾道の街は坂町海の町初夏の汽笛はレモンの島へ
鯉のぼり泳ぐベランダ泳ぐシャツ五月の風は若葉のにおい
蕗の葉を傘に見立てたかえるの絵遠い記憶のかすかなみどり
教習所のコース踏切線路にも咲くたんぽぽの黄色春色
赤薔薇の中に蛙の姿見るリアル親指姫かよ❤
たそがれは手動踏切鶴見線大川駅に薫る草原
はるばるとさぬき香川の琴電の赤い電車に残る横浜(ハマ)風

くろわさん、受験生になる

ともえ夕夏

dictionary くしゃみにも似てお手本のような発音記号の飛沫
たわむれのこどもちゃれんじから十年ずっと進研ゼミのＤＭ
偏差値が何かも知らずがんばれば高校生になれるでしょうか
かあちゃんの焼おにぎりが食べたいと言えり朝からワークを解く子
制服が新しくなる私立女子校の案内わか葉の緑
青いペンで書くと暗記がしやすいと今月二本目の青いペン
ふさやかに勿忘草の群生のように付箋を生やす教科書
夢を詰める隙間はあるか十五才きみの鞄はいつも重たい

飛蝗を握る

中村成志

亜脱臼引きずりながら重ねゆく言の葉はやく蝦蟇鳴き止めよ
すり減った踏み絵をさわるもう誰も踏んでくれない高さの棚の
たいていのものは落とせば壊れるし地を蹴らなければ鳥は飛べない
血の色は赤錆なればなまぐさく鉄のアマビエ煮て湯をつくる
気圧性偏頭痛あり髪の辺の飛蝗を握るほどの強さの
ともかくも泡と鳴咽は昇るものシャンパンフルート一本に立つ
皮膜のみ凝る血溜まりひりひりと初夏烈風になお揺れ止まず
犬の時間芒の時間蝿の時間野原が夏へ向かって戦ぐ

わたし宣誓

成瀬悠

誓いますあの日までにはキレイなオムレツが作れるようにするね
誓いますあなたを愛するようにわたしのこともギュッと愛します
誓います一緒に見るものがたくさん増えるように仲良くします
誓います肉球を吸う時は声を掛けて独り占めはしません
誓いますイライラしたら物に当たらずにシャドーボクシングします
誓いますあのコーヒーの味がまた楽しめるように淹れさせます
誓います見た目が変わっても嫌なことを言わせないようにします
誓いますじいじとばあばになってもあなたのことは忘れませんよ

きんきゅうじたい

にう

光芒の差し込む『天使突抜』を駆け抜けてゆくマスクのランナー
ウイルスがまん延している青空を優雅に泳ぐこいのぼりたち
人通り少ない路地でご婦人方がマスクをずらし井戸端会議
ウォーリーをさがせみたいだ最近はマスクしない人見つけ出すのは
「在宅用健康器具の買い取りは現在できなくなっております」
去年買ったマスクの紐をホチキスで補強する量山の如し
快晴の日にひっそりと巣籠りしうた考えるそんな一日
パソコンの画面でずっと会話する心にそっとZOOMしてみる

桃源８（『桃源Ω』二次創作短歌）

西淳子

つまらないせかいをかえるおまじない　ウーピー、ミンミン、カンフーパンダ
「青春はセミのおしっこ色だよ」と教えてくれたきみと飛びたい
あまりにもゆめみごこちよくていつのまにかきみに浸かってのぼせてたんだ
ビー玉のようにまっすぐ、まっすぐきみにぶつかる俺に気づいてほしい
あのときのふんわりとした風がいい。きみといっしょに風化するなら
きみの手は近くて遠い。待ち受けの、宇宙の果ての手に手をのばす
犬掻きできみの小舟をひっぱるよ思い出ひとつひとつ拾って
ラブ＆サンダー　きみの銃声を二人のスタート合図とおもう

あぢさゐとあじさい

西村曜

あぢさゐとあなたが書いてあじさいとわたしが書いて　ほんとうに遠い
あぢさゐの見目でのみ咲くあじさいが確かにあってたいてい赤だ
牛乳にその冷たさをうつされた買い物袋のなかの白砂糖
コインランドリーのなかはいつでも真昼間で眠たい妊婦が今日の店番
路線図のいちばん端にある町に暮らしているよ前世のふたり
黒鍵と発見「博士はそののちの三十年をひとりで生きた」
距離つまり空気の厚みを思うときここまで 473.3km
あぢさゐとあなたが言ってあじさいとわたしが言って　届いていますか

停電

ネコノカナエ

午後七時ばずんとここにかぶさった闇とくらやみあっちの部屋も
停電の寮舎のなかに夕闇をひとまわり濃くした闇がある
国道のコスモ石油はひかりたちどうやら闇はここだけらしい
大きめの声で話せば大きめの声は冴えゆく耳にざらつく
とりあえず帰れるやつは帰りなさい帰れないやつどうしましょうか
ああみんなホタルなんだねゆらゆらとスマホのあかり灯して動く
ロックされ閉じ込められたジャージとか脱水中の洗濯機とか
どうしようあさってからの○○○とか○のこととか○○○○とか

レインボー・レインブーツ（うたの日五・六月まとめ）

薄荷。

ほろほろと雨に撫でられ芍薬は夢とおんなじ速度で揺れる
大雨が降るときのために用意した星空模様の青い雨傘
音のない世界にぼくらを連れていく夕立はレモンジュースのにおい
ぽろぽろとビニール傘をたたく雨　おはよう地球、おやすみ地球
雨の日の美術館ではころころとポートレイトがこっそり笑う
雨あがりきらめく庭に降り立てば足もとから噎せかえる緑
夕暮れの街の湿度の柔らかさ歩行者信号点滅している
レインボー・レインブーツを光らせて水たまり道を選んで歩く

それは祈りの ～GOOD ON THE REEL ハナウタツアーによせて～

はとサブレ

絶対にまた会えるってお互いに信じていたから迎えたこの日
手と手だとちょっと遠いね微笑んで目と目を合わす時　間　が　止　ま　る
「ありがとう」（ありがとう）って言いあって言えないけれど伝わっていた
夢ならば覚めないでって叫んだの夢じゃないから憶えているよ
鼻歌の花ならいつでも咲かすからときどき水を与えにきてね
指ハートなんてここでしかやらなくて下手くそだけどそれがよかった
素晴らしき今日の終わりに素晴らしき今日の始まりきっと祈りの
いま聴いたばかりのセトリの溶けだしてこんなに弾むあやふやがある

アサガオが燃える

花井かだ

てのひらを重ね合わせてこの人を好きになれないままの六月
輪郭をただなぞるよう　簡単に好きって言ってしまっていいの
絶対に裸足を見せ合えない人をともだちと呼ぶ アサガオが燃える
嬉しいね楽しいねって感情のしっぽについてる哀しみのつぶ
こんなにも空は高くて青いのに君を嫌いな人がいっぱい
新品のカッターシャツはきらめいて親友同盟結ぶはつなつ
遠い星爆ぜていきます あの人の下の名前はなんだったっけ
いつまでも僕は僕だけどこまでも固有名詞で生きる悲しさ

迷子

花浜紫檀

ミズクラゲの解説を読むキクラゲの話をしてるカップルがいる
あの世にもこの世にも存在しない夢想みたいな新種のクラゲ
イルカショー終わりのイルカ眺めつつあまりに深いプールと気付く
深海に住んでか細い光でも光なのだと思い知りたい
奇跡ってよくわからない同じ日に同じ魚を見て笑ってる
３回もまわして欲しいウミガメは出なかったのが思い出になる
閉園後の水族館に客として残れる者はひとりもいない
生き物はみんな居場所のある迷子わたしも海で迷いたかった

マネージャー

ヒプノ寿司マイク

手作りのお守りの中なに入れる？ググって慌てて画面を閉じる
男子ってバカばっかりだ声でかい身体も角張りとっても怖い
親友に引っ張りこまれ入部してがんばれ白米毎日握る
試合後に勝った相手のスタメンがコンコースからあたしを見下ろす
ニヤニヤとひとりがデカい声で呼ぶ　ねぇ〈マネージャー〉〈こっちを向いて〉
無視をしてマネージャーなら大切な用具をバスへと黙々運ぶ
〈マネージャー〉負けた男子に明日からもいつものように呼ばれるんだな
親友はまんざらでもない顔をして手すら振り返したかったみたい

天気情報

廣珍堂

関西弁ぐいと含んだ低気圧明日はきっと東京に雨
大都市も黄砂のなかへ消えてゆき電車の音をごうと聞くのみ
ふるさとの墓地の林の隙間より盆の陽射しは指先に落ち
夏雲をちびっこプールで捕まえて保育園児は水の反映
予報ではプロメテウスが来ないままソドムはゲリラ豪雨となります
土砂降りを揺れるビニール傘に受け遅れたバスを待つ雨男
後輩を風下にして進みゆく吹雪に霞む下校の道を
朝ドラの虹の場面を確かめて「行ってきます」と傘を持つ君

八方遊人

笛地静恵

その一／土蔵には一人遊びの始まりに泉鏡花の美しき本
その二／旅先でマッタをかける大き手のあいつが去って将棋をやめた
その三／三つ又にろうそくを立て黙どうしふりかえらずにうちまで帰り
その四／徹マンへつき合い大きくあくびして朝の光りをかえる白猫
その五／四人ともなぎ倒したぞ最大のスイカを喰らう神経衰弱
その六／幾何学の面積問題解法　六角形と閃く夢に
その七／ジョーカーをどこで使うかどきどきの修学旅行　七ならべ
その八／口八丁また手八丁駅前の芸に負けたよ包丁を買う

花にたとえる

福山桃歌

縋るように抱きしめているうつくしいきみの名前を花にたとえて
いくたびもくちづけたならやわらかいその手のひらに残す傷痕
まひるまの月を映した湖の水面が揺らぐきみのなみだで
ここまでのすべてなかったことにしてきみを知らない過去を忘れる
よこしまな指でやさしくなでるのはふれあいすぎていたいくちびる
なにもかも通り過ぎゆくスピードでふたりをさらっていくながれぼし
さよならは想定よりも重たくてふたりでいても耐えられなかった
月並みな、でも切実でありふれたことばできみに手渡した愛

カボチャを食べる

ほしむうコト

きみのいない世界は別に変わらずに24時間で一日が経つ
下り列車は赤くてドレミを歌い出すきみはまっすぐ海へと向かった
よろこびもかなしみも同じ意味なのをあの日きみだけがきっと知ってた
どこまでも続く晴天だったっけぼくは毛布にくるまっていた
生きることが最善手とは思わない　夕凪　一人で何を見たろう
きみはもう何かの神になったかなスワローズびいきしているのかな
ときどき思う　きみは全然生きていて夜あの部屋でカボチャを食べる
きみのいない世界で別に変わらずにぼくは寝て起き歯磨きをする

走馬灯

まさけ

ひかりの階段みたいになっているフードコートから覗くオフィス
私の四十年をやすやすと裁つシュレッダーは二代目のはず
正しくは三代目だったシュレッダー入社十年、まだ若いな
若者が社の根幹と訴えて煙たがられた二十年前
消え去って行く日に貰った花束に見える入社当時の煌めき
発展の宿根に僅か激励をかけて立ち去る　速やかに去る
走馬灯のようにとよく言うがこの四十年は一瞬だった
これからの余生の道を歩むため早くも馬を描き始める

ナビつき！つくってわかるはじめてゲーム プログラミングの短歌のつくりかた

御糸さち

ナビの言う通りにすれば出来てゆく30／31までは
まっしろなノートに記す一片のゲームでも短歌でもない何か
ねえノードンこっちを向いて恥ずかしくなるほどどこかで聞いたフレーズ
繋いだ手からのシグナル（条件を満たせば頷くこともある、かも、）
白い顔して立っているヒトばかり　モノより思い出とか言いながら
ぼくのこのこころのこわれる瞬間をみまもっているきみをみている
もうそろそろ分かってきたねつくってわかるはじめて（略）短歌のつくりかた
いつだって世界はひとり夕焼けがメタルのひとつひとつに当たる

岐路そして帰路

三浦くもり

世界中の明かりをつけてしまいそうで降車ボタンは誰かに譲る
真昼間は頼りなかった看板がしつこく土地を主張している
新作のフラペチーノを飲み干してそれでも寂しい夜をどうする
本当は帰路ではなくて往路だと気付いて更に泣きそうになる
どの角も曲がらず家に帰りたい干渉できず岐路そして帰路
この街のファミリーマートの店員も私を客として出迎える
故郷の言葉でナンパされたから少し話を聞いてしまった
今日に置き去りにされたい思い出し笑いで生きていけそうだから

夢のあと

三浦なつ

不揃いな靴下ばかり増えてゆくように重ねる君とのくらし
一言も交わすことなく食卓の黄身をはじめに崩しゆく人
夏の日のアスファルトには干からびた蚯蚓が夢のあとのごとくに
行方さえわからないままふたりきり揺られる舟にかなしみひとつ
テーブルのオリオンビールの空き缶としずかに死んだ昨日のわたし
君の住む島を見下ろす飛行機は夕日に包まれ北へと向かう
夏の夜の網戸に顔をあずけつつ確かな君の寝息をおもう
永遠に戻ってゆけないあの夏の太陽をまだ探しつづける

またおいで

深影コトハ

京橋のイントネーション懐かしく一人称がうちへと替わる
どの家も皆代替わり千年の紅梅の下でガールズトーク
祇園にはやや不似合いなローファーで硝子細工の恋をしていた
抹茶グラノーラばりばり噛み砕き平成生まれの姉さん芸妓
新雪のように磨けよ厨房に青い眼をした見習いが居る
十字路は似ていてどこも違う道こんちきちんの頃またおいで
品川から東京までの7分に魔法が解けてゆく京おんな
おはようを東のアクセントに戻し東京十年目の朝が来る

雑トーストにも遠い

虫武一俊

もう海をいつから眺めていないのかシーチキン缶ぐわと開けつつ
会食をあれから誰ともしていないおれたちだから投石できる
つり革が魚や蟹を模している電車に乗って向かう海峡
マンションの二階から見る一階の住人の庭、あれはヨドコウ
世代論が語りにくいなわれわれは乱反射して氷河に眇む
指で土を掘り続けている二回目の夏　苛立ちに汗を感じる
もう宇宙に苦しさを託すことはなく　街灯に拠るいくつもの虫
雑という言葉も遠くトーストを牛乳で押し流し込む日々

野菜（短歌）の詰め合わせ

六浦筆の助

とれたてに君はかわいい笑顔見せキャベツをきざむ春のリズムで
玉ねぎをみじん切りする君の手はタタタンタタン踊れるビート
やせ土に少雨（しょうう）で甘きトマト成る　生き生きできる介護って何？
（しなびても包容力だぜ）おっさんにサニーレタスはサラダで語る
ぶら下げてしゃにむに働くニンジンをバニーガールに差し出す夫
浮気した夫のようなジャガイモをシチューにし、出す妻の復讐
夕闇をランプの形に吸い込んでふくらんでゆく畑のなすび
太陽に向けてラッパの葉は競うカボチャ畑の静かな響き

気持ちはつたわる

六厩めれう

とうとうと口から滑り出ることの意味の含有率の低さよ
言葉にも賞味期限はあるらしく呼気の匂いがいくらかばれる
自己啓発本そのままにマウントを取りに来るのは想定内で
言挙げをすれば必ずふいになるだから決して口に出さない
ここからは余談ですがというときに今日初めての生気みなぎる
権限を持たない人は束になり一つのことを覚えて帰る
他人から言われて腹の立つ言葉レパートリーに加えてもいる
言葉では僕を傷つけられないと格好いいぜパトリック・ジェーン

交差点かう

村田一広

交差点曲がるのは労力がいる行けるとこまで真つ直ぐに行く
開きたくない傘ひらき僕の陣地を確保して聴くコンサート
トッピングが均一に散るピザはないチェダーチーズのみのところが僕
やつと気づいてくれた頬つぺにハート描いて待つてた冥王星は
走れること忘れるほどに放置され中古車は青梅雨に濡れ通し
公園の石鹸がなぜなくなるの？　ネットごと鼠が引きちぎつてく
寸分も違はぬ虹のかかる山　昨日と同じ今日が来てゐる
虚空には鳩の羽根散る　夕暮れが闇になれないままさ迷つて

-pp

最寄るゑ≠

かっぱ寿司と河童かなしく言ひのこしひからびゆきぬ海苔と銀舎利
らっぱ吹きは喇叭かなしく吹きならしさうじやないのと烏の和する
はっぴうりは法被さみしく並べをり厄災ありて咒いもなし
しっぽきりは尻尾たやすく切りおとし岩にかくるる赤の一条
はっぱかかげ天晴狸早やかはり花嫁姿もなまめかしけり
らっぷよめる恰幅良しの大男“LOVE”のrhymeにつとはにかみて
かっぷいちの水に蜂蜜塩胡椒お皿に注げば河童燥ぐよ
橋詰の祠に地蔵九尊たち芥川なる河童の爪痕

孤独

ゆや ゆき

人混みに飲まれ孤独が増してゆく取り残された空き缶のよう
私だけどこかへ消えて居なくなる雑踏の中音も聞こえず
居心地の悪さだけが店内に響いて消えるアイスミルクティー
振り返り道を外れて歩き出す路地裏の道見知らぬお店
飛び込んだ見知らぬ画廊一枚の名も知らぬ絵に呼吸が戻る
突然にざわめき戻り青空が眩しいそうか私生きてる
公園のベンチで一人思うこと身勝手だけど風が優しい
どこからか子らの叫ぶ声がして噴水が今高く上がった

きみのクマ

ゆりこ

落ち込んだきみの希望はテディベア、作ってあげるよベージュ色なら
型紙を切り取る我は夕飯の時間を気にして押す炊飯器
水無月に裁つフェイクファー季違いを感じる我の短パンは黒
ジョイントが少し緩いねバンザイの手が落ちてきて大人しくなる
グラスアイ強く引く指オリーブの色を選んだきみは優しい
チョコレート色で刺繍をした口が誰かに似ている　おなかが空いた
我は母お花のニンジン3つ入れ少し甘めのカレーを煮込む
蜜月はいつか終わるね羽のない背を縫い留めるラダーステッチ

夜めいて薔薇

吉田八尾

君がくれしココアに触れた唇を起点に体が夜めいていく
精神のひかり届かぬ最奥へ隠す禁忌の思慕の欠片を
夜色の瞳も髪も触れたくて触れられなくてそう君は月
少年と青年の今あわいなるメタモルフォーゼを視る目の熱さ
夜に飛ぶ揚羽のような君の持つ色の彩度が強く溢れる
お互いの胸板を指す軽やかな友情のこと残酷なこと
週末に君と会う事思う度秘めたる夜が零れそうになる
性別を紫とする吾を抜きすいすいと来る日曜の朝

しあはせの音

龍翔

はつなつの雨のにほひの野の道を白いドレスのきみが歩めり
結婚をしてゐる人としてゐない人とが雑木林のやうに
読みかけの歌集ではなく本型のリングピローに指輪を置いて
イツモシヅカニワラツテヰルと約束を交はす二人は雨ニモ負ケズ
タイミングつかめぬままにわたくしが足元にまき散らすはなびら
ゆらゆらと誰よりもかがやいてゐるけふのぼくらは発光体だ
もうきみはとほくの誰かではなくて同じケーキを切るあひだがら
ハッピィ！としあはせの音立てながらポップコーンは弾けただらう

すり減ったピック・カスタム

若枝あうう

ボーナスで買ったギブソン夢中ってもう少しだけ言わせてほしい
特別な着メロにしていた頃のサビをイントロから思い出す
車から降ろすマーシャル　人もたぶん重たいほうが良い音で鳴る
簡単に夢は燃え尽きないけれど先月よりも高いガソリン
原キーにカポを挟んで言葉より伝わるなんてもう思わない
すり減ったピックの先を撫でるとき弦を恨みはしないよ誰も
だとしても生まれなかったメロディを秘めてすべての旅は終わるんだ
勇気をくれよディストーション　弱虫な俺にも愛が叫べるように

影の輪郭

渡辺かもめ

君はこれあんまり好きじゃないかもと言われて嫌いになる黒ビール
東京の夜の明るさ金魚鉢に金魚の影がぽっかり浮かぶ
夏の風吹くほど夏が訪れてスイカの肌をなぞる水滴
卒業生代表になりこの町で卒業生代表の子になる
葬式の合間に行った砂浜の辿り着きたくなかった流木
偶然に生まれたわたし飛び散ったインクで作る銀河のひとつ
会社宛で送っていいと言う友の少し大きい結婚指輪
コーヒーの香りに満ちていくオフィス　好きと言われて好きになる人

テレビに人が

渡邉知博

雨降りの夜がちょっぴりあつくなる停電だってここらいったい
ヒトのいる部屋ってこんな生きている人形みたいに寝転んでても
いつだって逃げ出したいの、こんなとこイキテル部屋は息苦しくて
星ひとつ輝かせない都会でも光っているよブルーライトが
雨粒を涸らした空がたゆたう雲をおしやって見えてくる月
ゆっくりとひかりがちきゅうにちかずくこのへやにとどくのはいつ
白月に晒されているこの部屋のテレビにひとが　こっちを視てる
ひとの手がカーテンを・世界を開くあちらに咲いた紫陽花の花

かみさま

和田晴美

神様はどこにでも居て見てるって　そうね見ているだけの神様
制服のスカートの花ひらかせて自転車が来る　下は短パン
5階まで階段で行くと何故かしら4階で着いた気がしてしまう
大丈夫じゃないですよね手を背なに当てる位の支えをそろり
急がせて悲しい気分をさせたなら笑いを取らずには帰れない
溢れると言ってしまって構わない降り出す雨には時々濡れる
病室は西へ西へと移されてさいはての窓から見た夕陽
飲み込んだものは魂かも知れん　妹と見たものの話する

テーマ詠欄「遊」

Go To Next Page

鐘が鳴ったら帰りましょう少しずつ超えてはいけない線が近づく
逃避行先は夜半の遊園地全部あなたのための光よ
まぶたからするするすべり落ちてゆき長いまつげに隠れてみたい
黒タイル踏んじゃいけない遊びからドロップアウトしたらはじまり
ひきこもりにはきつすぎる遊歩道なんてやさしい字面だけれど
寝転んで地球儀回し遊ぶ子ら宇宙に浮かぶ冒険者かな
遊歩道までは一〇分あるという一〇分間の話題を探す
土佐堀の遊歩道（プロムナード）の水たまり手を離さずにふたりは避ける
私とは遊びだったの？本命は他の猫なの？ねぇドラえもん！
真夜中のビルの谷間のブランコに乗りにゆきたき遊星の夏
あらわなる背に触れている　このあたりを遊撃手なるひと守るらし
砂遊び水遊びの果てカツを食べ噴水の頂上にベルの幻
絡みつくメロンミルクのけだるさを抱いてプールへ溺れるように
夜遅く二人で遊ぶ約束も許されるのは今夜までだよ
この星の水と空気が消えるまできみとふたりで遊んでいよう

◆相河東
◆青藤木葉
◆あき子
◆秋山生糸
◆麻倉ゆえ
◆アダムス理恵
◆天野うずめ
◆雨虎俊寛
◆新棚のい
◆有村桔梗
◆五十子尚夏
◆石川順一
◆泉　葉子
◆伊藤すみこ
◆うきすけ

自転車の鍵を毎朝放り投げ放課後探す不安な遊び
あなたにも悲しいことはありますか晴れた日の遊び方を知らない
心だけ空に自由に遊ばせて窓を遮るカーテンを選ぶ
流れてる空気のすじの緑と遊ぶうてなの重い音楽の色
夏空にぽっかり浮かぶあの雲がまるで綿菓子あの夜の屋台
天国がいつも春なら雪合戦なんてできるの今のうちだよ
Winnyの金子勇の名がなくてsoftether登大遊
鍵なくて遊びに行って帰ったら鍵なくてまた遊びに行って
「それなりに充実してたよあの頃は」遊び人だった賢者は語る
ドッピンという球遊び流行し中庭の石畳の忙（せわ）し
眠れない夜は夢想の海へ行く回遊魚にもなりたくなって
僕が絵を書いてゐるのを見て人はちゃんと一人で遊べてますね
連れだって来る孫もなく老人が静かに集うゲームセンター
園庭にできた大きな水たまりさえも遊具になる雨上がり
通り雨の遊撃の真ん中を行くミスを慰められた帰りに

◆宇祖田都子
◆泳二
◆hs
◆岡田濫
◆小椋　杏
◆音平まど
◆@kaizen_nagoya
◆金森人浩
◆神ヤ飛ビ魚
◆涸れ井戸
◆河岸景都
◆菊池洋勝
◆橘高なつめ
◆きつね
◆君村類

テーマ詠「遊」

米を研ぎ浸した水に手を入れる川遊びせし遠き日のごと
遊園地で観覧車に乗ることも叶わなかった恋よさよなら
遊覧船　君と乗れたら　てのひらを　重ねて一緒に海を見たいな
風に攫はれる遊具を夕暮れをきりきり舞ひを笑つてゐてよ
泣く前のあなたの頬が早朝の遊覧船のように静かだ
洞爺湖の遊覧船に乗りながら遠いあなたの景色を見ている
切り角が狭いハンドル窮屈で遊びは要るよ人生なども
ゆく川に糸はもつれてあやとりは曇りみ晴れみひとよのあそび
それぞれの風を絡ませ遊歩道　夏日は君の匂いが馴染む
遊撃手の守備位置ちょっと深くなるまたこの場所へ帰って来なよ
明けがたぼくを遊びに誘うがむしゃらなアンのような生姜色の猫
母と子で水気を拭いた手の甲にしずくを落とすはかない遊び
遊園地最後に行った君の手を最後にとった閉園だった
毎日が日曜だから気持ちよく寝息をたてる隣の夫は
長い長い滑走路みたい放課後のあの遊歩道を駆けて僕らは

◆久助
◆黒須紗里菜
◆こうげつしずり
◆小泉夜雨
◆さとうはな
◆佐藤氷魚
◆汐射ハルカ
◆紫苑
◆詩季
◆西鎮
◆雀來豆
◆諏訪灯
◆セサミスペースM
◆草流
◆たえなかすず

ふにゃふにゃと揉んで首にも巻けるのヨ　猫と遊んで終わる休日
遊ぼって言える勇気がこれからもあなたをきっと助けてくれる
ゲームでも死ぬのはいやでゲームでも別れはこわい旅立ちません
遊びではないと僕らを脅してる君の水鉄砲がかわいい
水滴があそぶ窓際とおいきみの髪に降る雨になりたい真昼
テレワーク終了メールを送信し夕陽に笑う遊糸に出会う
負けん気の兆し最後にアッカンベーする福岡の花いちもんめ
泣きそうなわたしにまっすぐメロンパン投げてよこした遊撃手のきみ
紫陽花の代わりの鞠を突きながらホモ・ルーデンスかなしみを舞う
休日に出掛ける靴と遊ばせてフレアプリーツレザーコクーン
こんな日は誘拐ごっこきみの手のやわらかいことやわらかいこと
あやとりの紐を交えてわたしたち逢瀬にしては拙いけれど
風鈴を鳴らして風はやってくるじゃあハンカチで遊びましょうか
ゆらゆらとあなたが口遊む歌に夏の光が溶け込んでいく
まだちゃんと上手く言えない感情を泳ぎ続けている回遊魚

◆多香子
◆瀧口美和
◆竹林ミ來
◆田中翠香
◆千原こはぎ
◆chari
◆月硝子
◆ともえ夕夏
◆中村成志
◆成瀬悠
◆西淳子
◆西村曜
◆ネコノカナエ
◆薄荷。
◆花浜紫檀

もう二度と会えないだろう夏の日の川辺で遊んだ謎のトモダチ
◆雛河麦

夜九時に手つなぎ濡れて見下ろした遊水池には闇が波立つ
◆ヒプノ寿司マイク

遊ぶときぼくはひとりで遊ぶだろうたった1つの小さな町で
◆平本文

周遊の船のさざなみ打ち来たり大津の宮の名残の岸に
◆廣珍堂

成したぞタイムマシンを人生のすべてを捧げほんとうに完
◆笛地静恵

星形の氷を舌で転がして遊びだなんて嘘をついてさ
◆福山桃歌

惑星を遊星と呼ぶことを知り横断歩道でホップステップ
◆ほしむうコト

あやとりの手と手に架かる赤い橋キャッキャ笑って渡るのだあれ？
◆細川エリカ

どうしても泣きたい時間を賭けようか（濡れそぼつだけの遊び事）
◆歩歩

ならないしなりたくもないキリギリス羨むアリはころされました
◆真野ありか

赤出して青出さないで赤止めて水道代のかかる遊びだ
◆御糸さち

はじめての外の世界に触れていま自由に遊ぶみどりごの髪
◆三浦なつ

時々はわざと混んでる列にゆくグループデートの遊軍として
◆深影コトハ

海に行き海に入らず砂に寝て笑い転げる幼児達こどもの遊び
◆衣未

働くのが得意ではなく　遊ぶのも得意ではない　竹林揺れる
◆虫武一俊

YOASOBIの「夜に駆ける」を流すから君のこころよあそんでおいで
◆六浦筆の助

ひとりでも遊びはできるひとりでも結婚できるひとりで死ねる
◆六厩めれう

幼な児が遊び疲れて早寝する仕事疲れの親は眠れず
◆村田一広

クマを手にひとり遊びをしてる子の好きなオヤツはチョコレートだよ
◆ゆりこ

観覧車遠くに玩具のようにありカラカラ廻る胸には渇き
◆吉田八尾

純白の花片広げ風と舞う乙女の姿ただ愛しくて
◆夜花

雨の日も来ないあなたを待つてゐる名前も知らぬ遊具となりて
◆龍翔

遊ぼう、の意味は年々変化してご飯を食べる遊びをしている
◆芦花

みずからを遊牧したく心もち多めにチャージしておくSuica
◆若枝あうう

遊覧船巡るめぐるよ　湖よ、ひとつのひとの音響を聴け
◆渡邊知博

鉢植えに土きっちりと詰めているあなたに欲しいウォーター・スペース
◆和田晴美

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から気になった一首をとりあげて200文字くらいで語る一首評のコーナーです

春空の余白のようなつまさきをきみはぽーんとほうりだしてる　雨虎俊寛

一首評　大坪命樹

春空の余白という言葉が、青春そのもののようなデート相手の「つまさき」に続くのが文学的思索を誘う。輝かしいだろう春空なのに、その不在の位置たる「余白」に「ぽーんとほうりだ」されているつまさきは、春空に対峙して描かれている。彼女の春に対する「ほうりだし」たような挑戦の意志を歌人は見たのだろうか？　しかし、それくらいつまさきが美しく表現されているのは、歌人の恋情ゆえにだろう。つまさきに象徴された彼女の美しさが、印象的だ。

内外と投げ分けたあと真ん中に投げるみたいな選曲をする　去年

一首評　雛河麦

なにが自分の真ん中か分かっていて、内外にも振ってみて。こと音楽に関しては自分のこと分かってるよなぁという感想とは別に。連作のほぼ中心に置かれたこの歌は外皮に包まれた種のようです。外側に配置した歌ほど外からの視点になっていて、冷静に状況把握してこの《真ん中》を守っている。一首目の《真ん中》とも呼応していて、どんな状況でも自分の真ん中を見失わない強さが強調されていると感じました。

薄まってしまったきみとの毎日を混ぜても混ぜても透けてくる底　千原こはぎ

一首評　にう

イメージとしてまず、色々な色の水彩絵の具を水で混ぜたような色どりのイメージがわきました。でも、混ざってぐちゃぐちゃではなくて「透けてくる底」なんだ、と意外でした。透き通って綺麗だけどちょっと切ない、不思議な歌だなと感じました。

這い這いを覚える前に死んだ子が乗せられてゆく白いコンベア　深影コトハ

一首評　西淳子

天国ってちょっと怖いところだなと思いました。お散歩カートを天使が押してくれるとかじゃないんだ……。コンベアのほうが効率良さそうだからしゃあないのかな。這い這いができる小さな子は這い這いで天国内を進むのかしら。車椅子を自走できない人や寝たきりの人もコンベアなのかなあ。などと、色々想像できて興味深い一首でした。将来天国へ逝くことができたら分かるんだろうけれど、私はたぶん地獄行きだからなあ（笑）。

買ってから一度もかけなかったまま壁掛け時計が死んでしまった　八重森かもめ

一首評　中村成志

率直がすべて良いとは思わないが、この歌は説得力を持って心に刺さる。ああ、時計は死んでしまったんだなと。
箱から出さないまま壊れてしまったのか。壁にかけずどこかへ立てかけていたのか。それとも、まだ生きていた時計を不要として廃棄してしまったのか。いずれにせよ、主人公の身勝手不注意によって一つの時計が死を迎える。それはひとつの時間、あったはずの空間の終わりを想起させずにいられない。

引き金はあなたにやらうこの恋は鉄砲ひとつ咥へる恋だ　朧

一首評　西鎮

浮気に没入していく主体の、比較的前向きな態度が綴られた連作にあって、最もそれを現した一首であろう。本来〈鉄砲〉を〈咥える〉行為は自殺に直結するものであり、それはあたかもこの浮気の行き着く先を予言しているようだ。そしてまた、口淫を暗示させる構造をも合わせ持っている。にも関わらず、その硬質かつ清々しい読み味により、この歌は主体の〈この恋〉への前向きな態度を読者へ訴えてくる。捻れそのものである。

自転車で葱を押さえて走ってる葱は時々飛んでいくので　和田晴美

一首評　御殿山みなみ

葱が飛んでいくのは「時々」。飛ばないときだってある、ことはわかっている。でも、「時々」が怖いから、押さえる。そんな自転車の漕ぎ方はけっこう大変だ。葱の安全か、漕ぎの安定か。人によっては選択が分かれそうな絶妙のライン。この人は葱の安全を取った。取りながら言外に感じる、押さえなかったとしても葱が飛んでいくわけではなかった道のり。それと合わせて思う、この人が葱を抱えて自転車でゆく回数。生活の回数。

ざわめいたまま終礼は始まらずいつしか森に変わる教室　泳二

一首評　雀來豆

十代の記憶。とてもロマンチックでとても大雑把な下の句の措辞に魅かれる。魅かれるのは、そもそも記憶は大雑把なものであるし、そもそも十代というのは大雑把な年頃なのであると知っているからだろうか。なんてちょっとしみじみしてしまったじゃないか。

同じ樹で育ったともと奪い合う陽の当たる場所生きるということ　chari

一首評　詩季

多くの葉を携えた一本の木は、陽や風が当たれば、それはもう美しい景を見せます。しかしその一枚一枚の葉は、実際は少しでも日光を受けてより濃くなりたいという一種の生存競争に身を置いており、お互い同じ木の一部であってもそこには胸をつかまれるような切なさが横たわります。淡々とした中に、表面ではすぐにはわからない深いところで、競争を強いられている時代を生きる私たちを重ねずにはいられません。

老いてなほ夢見ることの罪なれや迷へる道に若葉茂れる　横雲

一首評　こうげつしずり

現代では、「夢を見るのに年齢なんて関係ない。何歳からでもチャレンジできる」といわれることが多い。しかし実際には、年を取った人にしか分からない悩みや迷いがあるのだろう。
迷いながら歩く道。そこで見た生い茂る若葉。その先は、迷いの道の出口につながっていると願いたい。

短歌リレーコラム

望遠鏡 3

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　文字と音

書き手　御殿山みなみ

短歌をはじめるずっと前、回文を作っていた。「竹やぶ焼けた」のように、逆さから読んでも同じ文章のことだ。プレーヤーは結構少ないけれど、ちゃんとコミュニティもあったりした。というか、ある。

そのコミュニティで、回文って「文字派」の人と「音派」の人がいるよね、という話をしたことを、なんとなく今思い出している。作り手目線の話のようでいて、読み手目線の話だから、「うたそら」って「短歌誌」でいきなりそんなわけわからない話をするな、読み飛ばすぞ、と思われた方はこらえていただきたい。これが伏線となって短歌の話につながっていきますから。

今のところ明確なビジョンはないですが。

どういうことかというと、回文には「緩和規則」というものがある。どういうことかの説明に意味不明な概念を持ってくるなんて話が下手だなあ。ということで先に「緩和規則」を説明しよう。

さきの「竹やぶ焼けた」は、誰がどう見ても回文だと思うはずだ。「たけやぶやけた」、逆から読んでも同じである。では、「誰か書かれた」という文章はどうだろう。こちらは「おやっ」と思う人が多いのではないだろうか。確かに、最初の「だ」と最後の「た」に濁点のあるなしが存在していることに目をつぶれば回文だ。とはいえ、目をつぶらなくてはならない。

このように、誰がどう見ても回文だとは言えないけれど、惜しいし回文ってことにしてもいいんじゃない、というのを「緩和規則」という。なお、この概念自体は回文界の統一見解だが、この呼称がそうとは限らないことは申し添えておく。私が勝手にそう呼んでいるだけだ。ちなみに濁点のあるなしの緩和規則を「清濁変換」と私は呼んでいる。清濁変換は回文と認めない人も多い。体感では、むしろ回文を作らない人にその傾向が強い。

本題に入ろう。緩和規則の中には、「異音同字」と私が呼んでいるものと、「同音異字」と私が呼んでいるものがある。これは本当に私しか呼ばないかもしれない。それくらい、回文なんてものの構造を定義したがる人は少ないのだ。

簡潔に説明すると、「異音同字」は「下手なあなたへ」みたいな回文のことをいう。文字上は「へたなあなたへ」と疑う余地なく回文だが、発声上は「ヘタナアタナエ」となる。助詞の「は」「へ」を使おうと思うと出てくる緩和規則である。

一方の「同音異字」は、「男のことを」みたいな回文のことをいう。お察しいただいたように、発声上は「オトコノコトオ」と疑う余地もなく回文で（「を」は「ウォ」って発声なんじゃないのといぶかしむ方もおられるだろうけれど、現代の定義上は「オ」である。ワープロ入力するときは「WO」なので、それが発声に影響する気持ちはわかる）、文字上は「おとこのことを」となっている。

やっと冒頭に話を戻すことができたので、ひとつ問いかけをしよう。「下手なあなたへ」のような「異音同字」の回文と、「男のことを」のような「同音異字」の回文、どちらのほうがより「回文」らしいだろうか？　前者であればあなたは「文字派」だし、後者であれば「音派」だ。

どっちも回文じゃねーよ、と思う人もいれば、どっちも不自然に思わない、という人もいるかもしれない。ただ、ほとんどの人はここの感じ方に濃淡があるのではないかと推測している。もう少し例を足すなら、「泣きつ今日来し吸血鬼な」という文章は、パッと見た感じ回文ではないが、旧かなづかいに直すと「なきつけふきしきふけつきな」となって文字上は回文となる。これにノれたら「文字派」かもしれない。

「文字派」と「音派」でなにか戦争が起きているわけでもないので安直な見解を述べると、体感では「文字派」の人が多い気がする。とはいえ「音派」の人も珍しいとまでは感じない。ちなみに私はごりごりの「文字派」だ。「同音異字」の回文は、回文じゃないと思っている口である。

とりあえず、回文には「文字派」と「音派」がいる。このことは気づいていた。しかし最近、つまりは短歌を書き始めてしばらくたってから、この二つは本質的には多くのものを共有しているのではないかということに気づいた。

回文の「文字派」「音派」をざっくり翻訳したら、「目で回文を楽しむ人」「耳で回文を楽しむ人」となるかもしれない。とはいえ後者の場合、それは完全なる音的対称性ではないはずである。

例えば「チンパンジー」という名詞。ここに二回出てくる「ン」は、厳密には発声が異なるはずだ。前者は「ム」に近い音になるし、後者は比較的「ン」本来の音になるだろう。とはいえ「チンパンジー」が回文になったとして（そうだなあ、「チンパンジー人パンチ」でいいだろうか？）「音派」の人もその音素的な差異はスルーするように思う。

これはすなわち、「音派」であっても、ひらがなに定義された音は一種類である、という前提に立っているからだと推測している。それって根本は「文字派」の考え方と同じだ。まずひらがな的な区切りをした上で、文字を見るか音を見るかの違いでしかない。なぜなら、そもそも「逆さから読む」ことは非常に難しい。難しいから、どこかで「逆さからの読み方」を定義するしかない。その定義は、現状「文字単位」なのである（ここに踏み込むと長くなるので割愛するが、当然、ローマ字回文なんかも観念される。しかしこれはこれで、「逆さからの読み方」の別定義でしかないと考えられる）。

そういう意味では、回文界に存在するところの「文字派」「音派」という考え方は、短歌界に置き換えると、どちらも「文字派」でしかないような気がする。ということで短歌の話をします。

短歌を定義することが簡単なのか困難なのかはわからないが、とりあえず「5 7 5 5 7 7」とか「7」言うしかあるまい。ではこの「5」とか「7」とかの単位はなんになるのか。ひらがな単位になるしかないのだろう。一応触れておくと、拗音はそれがくっつくひらがなに包摂されるし、促音は独立する。だから「注射針」は「5」だし、「プルトップ」も「5」だ。

とはいえ私には、ひらがな単位の「5」「7」は現実的には無理だろうと感じられるふしがある。

例えば「カタルシス」という言葉がある。これは「5」だ。すごくわかる。文字数も「5」だし。では「けんちんじる」はどうだろう。短歌的には「6」なのだろう。文字数は間違いなく「6」だ。ただ、私には「けんちんじる」が「カタルシス」より「数が多い」ことがしっくりこない。「カタルシス」って口に出す時間と、「けんちんじる」って口に出す時間を比べたら、後者の方が短いんじゃないかと思ったりもする。

これは何が悪いのかとなれば、きっと口語短歌が悪いのだろう。私が大好きで、ずっと書き続けている口語短歌が悪い。やはり、ひらがな単位で考えるというのは書き言葉の考え方であるし、「吟じ」とか「決まった節回し」とかを持ち込まなければ口語短歌では成立しないように思う。となると、口語短歌における「5 7 5 7 7」は、「それっぽい長さ」でしかなくなるわけだけれども、そんなもの共通項的に定義できるわけがない。

ということで、最近は口語短歌の展望は朗読にあるんじゃないかなんてことを考えている。朗読のされ方によって、口語短歌の定型感が決まっていくんじゃないだろうかということを。しかしこれに関してはまだなにも結論がないので、この話はここで終わる。

リレーエッセイ 3

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　恋
書き手　chari

成就する恋を恋とは呼ばないと発達心理Ｉのテキスト

chari

昨年の夏、大学生になった息子と神威岬までドライブした。息子とは、中学、高校の六年間、ほとんど口を聞いたことがなかった。行き帰り四時間ぐらいであっただろうか、二人でその六年間を埋めるかのようにたくさんの話をした。家族のこと、いじめのこと、部活のこと、受験のこと。初めて話す内容ばかりだった。そんな中に、恋の話も含まれていた。

息子はテニス部で、八月半ばにやっと引退し、受験勉強に本腰を入れ始めた。予備校に通わなかった彼は、放課後、学校の自習室で勉強していた。九月の大雨の日の自習室が閉まる時刻、彼はため息をつきながら校舎を出た。その時、前方を傘も差さずにびしょ濡れになって歩いている女子がいたそうだ。クラスメイトのKさん。彼は早足で追い付き、ビニル傘を差し掛けた。「どうしたんだよ」という彼の問いかけに返事はなく、彼女はただ歩き続けた。彼は、その時やっと気づいたらしい。彼女が泣いていることに。

「この時は、父さんの馬鹿でかいビニル傘を借りてきていて、本当によかったと思ったよ」

「そうか。それで、お前はどうしたんだ」

「しょうがないだろう。傘を差し掛けたまま、黙って彼女に付いていったよ」

二人は、そのまま駅まで歩いて、電車に乗ったらしい。電車の中でも、彼女の涙は止まらず、できるだけ人目に付かないように息子がドアの隅で庇っていたそうだ。

「お前の胸で泣くって感じにはならなかったのか」

「ううん。微妙なところだったかな」

彼女の目的の駅に着き、また、雨の中を歩き出したそうだ。辿り着いたのは総合病院。そこで、初めて彼女が口を開いて「ありがとう」と言って、彼女は病院の中へ駆けていった。

「おばあちゃんが亡くなったんだって。昨日、一緒に笑いながらテレビを観ていたのに。心筋梗塞だって」

息子が海を見ながら話し続けた。

「『涙が急に溢れてきて、止まらなくなって、自分でもびっくりした』って言ってた。そして、『ありがとう』って、もう一度言われたんだ」

「そうか」

その後、二人は、毎週火曜日に一緒に自習室で勉強するようになったらしい。勉強の息抜きに、映画にも二度行ったそうだ。二人の受験が終わったのが三月。彼女は、東京の私大。彼は北海道の国立に決まった。その後、一度だけ二人でディズニーランドへ行ったそうだ。

北海道へ旅立つ日、彼女は羽田空港まで来てくれた。初めは会話も弾んでいたのに、出発時刻が近づくに連れて、二人とも無口になっていったらしい。

「それでさあ、彼女が言ったんだ。『いってらっしゃい。そして、さようなら』って」

「お前は、なんて言ったんだ？」

「『ああ』って。そしたら、彼女が『馬鹿ね』って言って、走って行っちゃったんだ」

息子の恋の話はこれで終わり、話題は深夜ラジオへと転じられた。

次号予告　うたそら 第4号

連作欄　8首の連作 自由詠
テーマ詠欄　「学」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」

短歌募集

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
http://kohagiuta.com/utasora/

第4号 〆切 '21 8/31（火）24時
●8首の連作 自由詠　●テーマ詠「学」1首

第5号 〆切 '21 10/31（日）24時
●8首の連作 自由詠　●テーマ詠「食」1首

編集後記

近畿では例年より３週間も早く梅雨入りとなりましたが、そのぶん前倒しで梅雨明けとはいかないようです。ときどき夕立も見られるようになってきて一歩一歩夏らしさが増してくる今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

このたびは短歌誌「うたそら」第３号へのご参加、ありがとうございます。ご寄稿くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第３号の参加歌人さまは109名、連作欄には88名、テーマ詠には86名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「遊」。少し難しいお題だったのかもしれませんが、楽しい遊、さみしい遊、懐かしい遊など、さまざまな「遊」が集まりました。まだまだいろいろな遊びを我慢している昨今、お家でゆっくりと「遊」の短歌をお楽しみいただければ幸いです。

前号の「うたそら」から気になった／好きな一首を選んで、200文字程度で思いを綴っていただく一首評「そらよみ」は第２回となりました。歌を投稿するだけではなく、読んで感想を伝える／もらうことで、得られる気づきや喜びもあるのではと思います。ぜひ次回もご参加ください。

また、短歌なリレーコラムでバトンを引き継いでくださったのは御殿山みなみさん、リレーエッセイはchariさんが書いてくださっています。

「うたそら」では Twitterでの呟きもお待ちしております。「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をお聞かせください。

次号は８月末〆切の９月初旬発行、テーマ詠のお題は「学」です。無事に夏を超えた皆さまのすてきな作品を楽しみにお待ちしております！

編集鳥　千原こはぎ

うたそら　第３号

発行：2021.07.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/